

## 平成24年度国民保護実動訓練の実施結果について

### 1 目的

緊急対処事態（大規模テロ等）に備え、県、市及び関係機関相互の連携や対処能力の向上を図るとともに、県民の皆様に国民保護制度の普及を図るため、実動訓練を実施しました。

### 2 概要

#### （1）実施日時

平成24年10月23日（火） 13：30～15：30

#### （2）実施場所

さいたまスーパーアリーナ

#### （3）参加機関

県、さいたま市（共催）、陸上自衛隊（第32普通科連隊、第1特殊武器防護隊）、埼玉県警察（警察本部、大宮警察署）、さいたま市消防局、さいたま赤十字病院、自治医科大学附属さいたま医療センター、埼玉県済生会川口総合病院、日本赤十字社埼玉県支部、さいたま市中央区自治会、さいたま市大宮区自治会、(株)さいたまアリーナ、(株)さいたまアリーナ関係企業

#### （4）参加者数

487人

#### （5）訓練想定

さいたまスーパーアリーナでイベントが始まろうという時、観客席で化学剤（サリン）と爆発物を使用したテロが発生

#### （6）訓練内容

##### ア 現場における初動体制の確立

- ・ 情報伝達、観客の避難と誘導
- ・ 有毒な化学物質の有無の検知と確保
- ・ 除染
- ・ トリアージ
- ・ 爆発物処理

- ・ 負傷者等の救護と搬送
- ・ 現地調整所の設置

#### イ 緊急対処事態対策本部の設置

### 3 今回の訓練の特徴

- (1) 今回初めて、多数の負傷者を実際に医療機関（さいたま赤十字病院、自治医科大学附属さいたま医療センター）へ搬送してトリアージを行い、負傷に応じた治療を行いました。
- (2) 今回初めて、被災者の心のケアを行う救護所を設置し、日本赤十字社埼玉県支部が運営しました。

#### <参考>

##### ○ 国民保護とは

武力攻撃事態やテロ攻撃から国民の生命、身体及び財産を保護し、国民生活等に及ぼす影響を最小にするため、国、自衛隊、警察、消防、自治体等が連携し、国民の生命と財産を守ることです。

国民保護法は、平成16年6月14日に成立し、県の責務（国民の避難や救援の実施）が定められています。

県では、円滑に国民保護措置を実施できるよう、平成18年1月に国民保護に関する埼玉県計画を作成しています。

##### ○ トリアージとは

負傷者を重症度や緊急度などによって分類し、治療や搬送の優先順位を決定することです。

災害時において、限られた医療資源（医療スタッフ、医薬品等）を最大限に活用し、可能な限り多くの傷病者の治療を行うためには、負傷者の状態の緊急性や重症度に応じて治療の優先順位を決定し、患者搬送、病院選定、治療の実施を行うことが大切です。

#### 4 訓練の状況



平成24年10月23日（火）午後1時30分、さいたまスーパーアリーナの観客席で、小爆発が起き、液体が飛散。付近の観客が倒れ、逃げ始めます。異常を察知した警備員が施設内の防災センターへ連絡し、そこから警察や消防、市、県に通報しました。



防災センターでは、緊急放送を流しました。イベント警備員や㈱さいたまアリーナ社員が、観客の避難誘導を行いました。



大宮警察署の警官が到着しました。イベント警備員や㈱さいたまアリーナ社員とともに、大宮警察署の警官が誘導を行い、避難者を屋外に一時避難所に誘導しました。その後、警察官により、内部の状況や体の異常等について事情聴取が行われました。



さいたま市消防局が到着しました。

その後、周囲に有害物質がないかどうか確認し、安全な場所へ消防現地指揮本部や除染所、救護所を設置しました。



さいたま市職員が到着し、現地調整所を設置しました。現地調整所とは、災害やテロなどが発生した現場において、警察や消防、自衛隊、医療機関などそれぞれの機関が、現場での情報を共有し、活動における調整を行うため、市や県が設置するものです。（現地調整所テントは画像右上）



警察本部機動隊NBC部隊が到着しました。検体（化学剤）を密閉容器に入れて搬出するため、アリーナ内へ進入します。

NBC部隊が着用している防護服は、気密一体型の化学防護服で、消防の防護服と同じ機能を持っています。



さいたま市消防局の検知隊と進入隊が発災現場へ向かいました。検知隊は危険地域を特定し（検知）、現場を調べます。検知隊は、呼吸用のボンベを使用し、気密性が一定に保たれる「陽圧式化学防護服」を着用し、有害物質から隊員の身を守ります。



大宮駐屯地の陸上自衛隊第 32 普通科連隊と、練馬駐屯地の第 1 特殊武器防護隊が到着しました。現地調整所で情報収集をした上で、救護所と除染所の設置、重症者の救助活動の準備にとりかかりました。



災害派遣医療チーム、DMATの「さいたま赤十字病院」「自治医科大学附属さいたま医療センター」「済生会川口総合病院」が続々と到着しました。これらのチームは大災害発生時に被災現場に出動し救命活動を行うため、機動性を有し、専門的な訓練を受けています。



進入していたさいたま市消防局の検知隊が、要救助者と化学剤を発見しました。その後、サリンの可能性が高いことが判明しました。進入隊は、自衛隊員と消防隊員が行う救出作業を効果的に行うため、狭い観客席から広い通路へ、倒れている観客を運び出します。



陸上自衛隊第 32 普通科連隊が、観客席で倒れている重症者を救出するため、アリーナ内へ向かいました。

着用している防護服は戦闘用防護衣と呼ばれ、ボンベを使用せず、マスクに付けた吸収缶で空気中の有害物質を取り除くことができます。



進入していた警察本部機動隊NBC部隊が、サリンと疑われる物質を、密閉された容器に入れ、検体を確保、搬出しました。



爆発物が隠されている恐れがあるため、生化学防護服を着用した警察本部機動隊NBC部隊の第2陣が、不審物の検索と発見、そして爆発物処理班が活動できるエリアを確保するため、アリーナ内へ進入しました。



陸上自衛隊第32普通科連隊が、重症者たちを担架に乗せ、屋外へ救助しました。その後、さいたま市消防局がトリアージを行い、重症者を担架搬送者用の自衛隊除染所と、歩行可能者用の消防除染所に分けました。



さいたま市消防局の除染所で、重症者の体についた化学剤を取り除く「除染」が行われました。重症者を担架に乗せたまま汚染された衣服を脱がせ、はさみで切って取り除きました。その後、担架に乗せたまま、薬剤を体に浴びせ、化学剤を洗い流しました。



陸上自衛隊第1特殊武器防護隊が除染を開始しました。自衛隊の除染所は屋根が高いため、立った状態で有害物質を洗い流すことができるので、軽症者など歩行可能者の除染に適しています。自衛隊員が観客に除染の説明を行い、まとまった人数を除染しました。



「さいたま赤十字病院」、「自治医科大学付属さいたま医療センター」、「済生会川口総合病院」除染を終えた観客にトリアージを行いました。負傷の度合いに応じて、緑（軽傷）、黄（早期の治療が必要）、赤（緊急治療が必要）、黒（死亡）のタグを観客に付けました。



アリーナ内で、観客席周辺を検索していた警察本部機動隊NBC部隊が、爆発物らしきものを発見しました。

爆発の可能性を考慮し、防爆マットで防爆措置をとります。現地調整所では爆発物処理を始めるタイミングを協議し、救助活動終了時に始めることとしました。





今回の訓練では、初めて被災者の心のケアが行われました。日本赤十字社埼玉県支部の心のケアチームが参加し、救護所テントでは、身体的、思想的、感情的、行動的に、何らかのストレス反応が現れた被災者に対し、処理法を伝える等のアドバイスを行います。



さいたま市消防局の救護所では、重症者に対する救護活動が行われました。

サリン中毒のように症状が重篤な場合、負傷者の呼吸状態が悪化するため、気道の確保や酸素投与、人工呼吸などの呼吸管理を行いました。



陸上自衛隊第 32 普通科連隊の救護所では、軽症者に対する救護活動が行われました。

サリンを除染した後の軽傷者への観察や処置、避難の時に発生した体調不良者、転倒などの怪我等に対して、応急的な処置や治療を実施しました。



さいたま市消防局と陸上自衛隊第32普通科連隊によって、重症者の医療機関への救急搬送が開始されました。

自衛隊員が担架で重症者を救急車に運び込み、さいたま赤十字病院と自治医科大学附属さいたま医療センターに搬送、そこで治療を行いました。



アリーナ内で、警察本部機動隊爆発物処理班が防爆防護服を着用し、観察や装備資材を活用し、爆弾の疑いが濃厚と判断しました。防爆性能を持つ重機によって、爆発物を搬送する専用の車両に収納し、緊急走行で解体処理場所へと搬送しました。



陸上自衛隊第32普通科連隊とさいたま市消防局が連携し、汚染された場所の除染を行いました。

自衛隊が除染器を使って、汚染物質を洗い流し、消防が測定機器を使って汚染物質が残っていないかどうかを確認しました。

汚染された場所の除染活動を行い、周辺の安全が確保されたところで、さいたまスーパーアリーナで行われた訓練は終了しました。



また、今回初めて、負傷者を実際に医療機関（さいたま赤十字病院、自治医科大学附属さいたま医療センター）へ搬送し、負傷に応じた治療を行いました。（写真はさいたま赤十字病院）

多数の負傷者が、医療機関へ同時に搬送された状況を想定して訓練が行われました。



さいたまスーパーアリーナから搬送された重症、中等症の13名（さいたま赤十字病院10名、自治医科大学附属さいたま医療センター3名）は、病院内が汚染されないよう除染された後、治療を受けました。（写真は自治医科大学附属さいたま医療センター）